

## 荒木牧人作 「未来へ」

<前編>

臼井春(雪の妹) あれ、兄貴！ まだ起きてんの？ そんなに考えてっと、頭ハゲるよ。

雪ナレーション 夜中に水を飲みに起きた妹にそう言われたのは、おれがまるでどこかの夢遊病者のように、真夜中の 3 時過ぎまで、英単語帳を見て、ブツブツつぶやいていたからだ。

雪 そうだな。そろそろ寝なきや。

雪ナレーション 使い込んだ英単語帳を投げ出すと、おれは後ろに引いてあった布団にそのまま倒れ込んだ。眼鏡を外して机の上に置き、少し好き勝手に伸びてきた前髪をかき上げた。その時、自分でもちょっとドキッとするほどの髪の毛が抜けた。

雪 げ！

雪ナレーション 髪の毛が薄くなってきたことは、前々から感じていたが、まさか、いつの間にか、こんなに薄くなっているなんて、想像もしなかった。頭のとっぺんの地肌が手で触れると、かすかにそれとなく分かるのだ。

雪モノローグ やばいよ、これ…。

雪ナレーション 次の日の朝——。

母幸 (声を張り上げて) 雪——！ 遅刻するよ！ 置きなさい。

春 兄貴。ゆうべ、夜中ずっと起きてたんだよお。

母 あらあ、本当に？ 全くしょうがないわね、お兄ちゃん。

春 (食べながら) まあ高 3 の 12 月だから… あー！ もうこんな時間！ お母さん、弁当早く！

母 はいはい、春ちゃん大好物のブリの照り焼き入れといたから。

春 あんがと。あー！ やだ、髪の毛ボサボサー。

雪 いいよなあ、髪の毛の多いやつは…。

母 何くだらないこと言ってるの！ もう 8 時過ぎてんものよ。早くご飯食べなさい！

雪 分かりましたよ、母上。

雪ナレーション おれは臼井雪。“雪が降る”の雪だ。何でも 18 年前の生まれた日が、時ならぬ大雪だったんだって。県下ナンバーワン高、私立青春高校の 3 年生だ。もう入試も間近の 12 月。志望大に入れるかどうかで、大いに危険を背負っている。そのせいで、頭髪がかなり薄くなってしまったのだ。おれの家は 4 人家族だった。おれが猛勉強し始めた 3 か月ほど前までは…。今年の 9 月 17 日、父は交通事故に巻き込まれて死んだ。本当に不慮の死だった。夜、残業で遅くなった父は、家の前の交差点で、長い信号が青に変わるのを待っていた。赤いスポーツカーが、明らかに信号が変わったのに、父が歩き始めた横断歩道に強引

に突っ込んできたという。即死。その車は、父のほかに3人も跳ね飛ばし、ガードレールに突っ込んでから、それでも止まらず、交差点角の喫茶店に突っ込んで、店をメチャメチャにしてようやく止まった。警察の話では、時速150キロ以上のスピードからの無理な右折だったそうだ。父の遺体は、とてもまともに見られるものではなかった。母はそれを見るのを拒み、妹とおれは見たのだが、2人とも目を大きく見開いたまま、放心状態だったのを覚えている。次の日の朝刊に、地方版の小さな記事として、父の事故は載っていた。

父は、おれが高校受験で苦しんでいたところに、家から5分ほどのところにある教会へ、水曜日の夜、通い始めていた。大手スーパーの販売部長をしていた父は、近くにライバルの店が進出してきて、競争が激しくなり、かなり悩んでいたみたいだった。でも教会に行くようになって、少しずつ明るくなっていくのがおれにも分かった。「神様が最善に導いてくださる」とよく言っていた。そして、“もう若葉大を受けるのをやめよう”と何度も挫折しかけていたおれを励まし、キリスト教の聖書を読んで元気づけてくれた。仕事柄、月曜日が休日だったので、「ああ、日曜日も教会に行きたいのになあ」と小声でボソボソ言っていたのを思い出す。キリスト教にはほとんど興味のないおれにとって、“教会”というところがどんな深い意味を持っているのかは、全く分からない。でも、仕事の鬼だった父を、あんなに穏やかに変えてくれたキリスト教の神様には、十分感謝したい気持ちだ。

おれの頭の毛の話から、なぜ父の話になったか。実は、死んだ父の頭はかなり薄くなっていたのだ。だからもし将来、おれがハゲるのなら、決しておかしくないのだが…。

雪 (食べながら) ねえ、母さん。父さんって、いつごろからハゲてたの？

母 え？ いきなり何なの、この子は？ んーん、母さんがお前を生んだ時は、父さん確か34、5だったけど、もうかなり薄かったわよ。…それより早く食べなさい！

ナレーション かなり早かったんだ。だけど18歳はないだろう。  
次の日、学校で――。

(効果音) (教室のガヤ)

割田<sup>きよし</sup>聖 おい、雪！ お前また今日、遅刻したじゃんかよ。たるんでるぞ！

雪 ああ、聖。眠たいんだよ。ほっといてくれ。

聖 そうはいかねえぞ。今日こそ、この前半分くれるって言ってたあの養毛剤、くれよな。

雪 あ――――、そうだった。(あくび) 忘れたあ。

聖 マジかよお！ いい加減にしろよな。こっちだって危機迫ってんだよ。お前だけをフサフサにさせない！

ナレーション 彼は割田聖。高校に入ってからできた親友だ。勉強一色のこの青春高で、なかなかこういう明るさを持ったやつはいないんだ。とてもいいやつで、おれの悩みに本気で考えてくれる唯一の人間だ。だから、おれの“ハゲの悩み”も、学校では彼しか知らない。

雪 じゃあ、帰り、うちに寄ってけばいいよ。

寄与し ああ、そうするよ。でも雪、お前、昨日徹夜？ 目にクマができてるよ。

雪 徹夜じゃ…ないけど。

聖 (ゆっくり)睡眠不足って、髪によくないんだよ。規則正しい生活が… おい、寝んなよ！

ナレーション 授業開始 5 分前だったが、僕の体はどうしても安眠を求めているようだったので、眠ることにした。(間)おれは夢を見ていた。

(音楽) (ブリッジ。夢)

神の声 (フィルター音。エコー)さあ、行くのだ。早く！ ためらってはならない。早く！

雪 な、何のことですか？ 分からないですよ。

神の声 (フィルター音。エコー)あなたの父も、そして今、あなたの母も…。さあ、早く！

雪 父さんが…。母さんが…。一体どうしたって言うんだ？

父しぐれ時雨の声 カミは愛なり。

雪 髪は愛？ まさか…。カミ(髪)、カミ(神)… どのカミ？

父 カミは愛なり。

雪 父…さん？

父 カミは愛なり。

雪 父さん。教えてよ！ 分かんないよ、父さん！

父 ああ、日曜日教会に行きたいのになあ。

雪 まあた父さん言ってるよ。

父 ああ、日曜日も…。

雪 (かぶせて)教会だね、父さん！

(効果音) (教室の笑い声)

雪 (夢から覚めて)んん？ え？

(効果音) (先生が教科書で雪の頭をたたく音「バシ！」)

先生 何が教会なんだあ？ 臼井！ ったく、受験1か月前で、なぜ気合いを見せない？ やる気が出ないなら、別に教室におらんでもいいから、図書室にでも行って勉強してこい！

男子 (うれしそうに)いいんですか、先生？

先生 お前に言うたら…。

男子 (かぶせて)イエーイ！ 図書室行こうぜ、みんな！

(効果音) (生徒の歓声)



18！ヘタすりゃ親子だよ。

母 そうだね。

雪 ハッハッハ。何だか力抜けるよ、全く。

母 昨日の昼に、産婦人科行って調べてもらったら、「おめでたですよ」って先生に言われたの。もしかしたら、神様が母さんの願いを聞いてくださったのかも…。

雪 何、母さん、神様にお願いしてたの？

母 そうよ。「お父さんの最後の子供を授けてください」って。

ナレーション それから母は、週に1回、産婦人科の病院へ通うことになった。でも父の死後、おれたち子供2人を育てるために働き始めた母は、辞めるわけにはいかないようで、その週に1回の通院も大変なことだった。毎朝、遅刻寸前のおれをたたき起こし、妹春の弁当を作ってから会社に行く母。その姿を今見ていて、おれは自分が働くことで母の苦労を少しは和らげることができるのではないかと考え始めた。なんせ母のおなかの中には、じきおれの弟か妹になる赤ちゃんがいる。しかも、いわば父さんの忘れ形見の赤ちゃんを抱えた母に、無理して万一のことがあったら大変だ。おれは一応、親友の割田聖に相談することにした。

聖 入試間近ってのに、それどころじゃなくなってきたってわけ？

雪 うん。大学行くのも、今考えてるところ。

聖 うーん。バイトかあ。確かに、この時期バイトするなんて、入試を捨てたとかか考えられないけどなあ。でもさ、そういう状況なら、しょうがないんじゃないの？

ナレーション おれはそのあと、聖に日給1万円のアルバイトを紹介してもらった。学校は3年生のみ入試に備えての“家庭学習期間”に入る前日だった。

聖 じゃ、2か月ぐらい会えなくなると思うけど、とにかく、苦しいのは今だけだから、頑張ろうぜ！

雪 うん。ありがとう、聖。

聖 道路工事のバイト、しっかりな。

ナレーション おれたちは、堅く握手を交わして、それぞれの戦場へ向かおうとしていた。おれは、父の遺伝で頭の髪が薄かったが、もう将来ハゲることを心配している暇はなくなっていた。

(効果音) (工事現場の音)

ナレーション 道路工事のバイトは、思ったよりきつかった。今まで高校2年の夏に3日間だけ、靴磨きのバイトをしたぐらいで、バイト経験ゼロに近かったおれには、心身ともに疲労が大きかった。冬の強い日差しに照らされ続けるおれは、いつしか顔が目から下だけ真っ黒に日焼けし、日本人であるのが疑われそうだった。監督にどなられ、ダンプカーの運転手に空き缶を投げつけられ、一時的にはカッとするものの、それでもおれはぐっとこらえて、一生懸命働いていた。バイト

が終わって家に帰ってからは、猛烈な眠気と闘いながら、入試の勉強をした。最初は反対していた母も、おれの考えを読み取ってくれたのか、何も言わなくなり、店に頼んで仕事の時間を半分にしてもらった。

そんなある日、その日の工事現場で、一緒に仕事することになった同年輩の男性を紹介された。

早川龍雄 早川です。今日は一日、よろしくお願いします。

雪 臼井です。さっき、この現場は工事あと1週間ぐらいかかるって言われましたから、1週間同じだと思いますけど、よろしくお願いします。

ナレーション 早川龍雄。県立若葉高校3年の18歳。昼休みに、おれは彼と話した。話が進んでいくうち、彼は自分の家のことも話してくれた。

龍雄 おれのいえは12人兄弟なんだ。おやじは、自分の子を1ダースつくるのが夢だったんだって。おれはその下から2番目。だけど、母親が「もう無理」って言うて怒って離婚して、結局、12人の子の母親は4人なんだ。分かる？

雪 え？ すごい家族だね。何て言ったらいいのか…。

龍雄 ほかの兄弟は、おやじのこと憎んでるけど、おれは、そんなにもう憎んでない。そりゃあ憎い時もあった。絶対いつか殺してやろうと思ってたのは事実だし。おれ、おれね、小さいころ、まだ小学生にもなってないころ、おやじに捨てられたんだ。

雪 え？

龍雄 「お前を食わしていく金がないんだ。赦<sup>ゆる</sup>してくれ」って、どこか知らない遠いところへ置き去りにされたんだよ。

ナレーション おれは、自分の家庭が一番不幸だと思っていた。だが、こいつが、こんな苦勞をしていたなんて…。

龍雄 憎んで当たり前なんだろうけど、クリスチャンになって変わったせいだろうな。

雪 え？ 何、クリスチャンて、あの、キリスト教の？

龍雄 そう。実は今日「臼井さんて人と一緒だから」って事務所の人に言われた時、「もしかしたら」って思ったんだ。

雪 何が「もしかしたら」なんだよ？

龍雄 いやあ、おれの行ってる教会にね、去年、交通事故で亡くなられたんだけど、“臼井さん”て人がいてね、もしかしたら、その臼井さんの息子さんかなあって思ったんだ。

雪 じゃ、その教会って、尾崎町の「バプテスト教会」とかっていうの？ そうだよ。おれ、その臼井の息子だよ。

龍雄 や、やっぱり？ 似てるんだよね、顔が。

雪 そうかなあ。あ、でも、おやじのこと、よく知ってるの？

龍雄 うん。おれ、水曜日にも教会行ってたからね。あの人、日曜日は仕事って言っ

てたから。でも、水曜日は必ず来ていたよ。

雪  
ナレーション  
へえ一驚いた。やっぱりまじめに教会に通ってたんだな、おやじ。  
早川は、教会のこと、キリスト教のこと、そしてイエス・キリストのことをいろいろと話してくれた。それからの、彼と一緒に 1 週間で、おれは驚くほど自分が変わったような気がした。

龍雄  
ナレーション  
薄井君が受かって一緒に学べるように、祈って待ってるよ。  
推薦で若葉大に行ける早川は、そう言って力強くおれの手を握ってくれた。家に帰ると、おれは父の書斎から聖書と「日々の糧」という本を取り出して、その日から毎朝読み始めた。父の引いたマーカーがいっぱい入ったその本は、父のたどった心の軌跡を見るようで、受験の不安に駆られるおれの心をも、見えない何かを引き付けていくようだった。こうして入学試験当日の朝となった。

雪モノローグ  
ナレーション  
やれるだけのことはやった。  
そう自分に言い聞かせてから、おれは「日々の糧」を開いた。

雪  
「2 月 27 日。  
私は神に信頼しています。  
それゆえ、恐れません。  
人が私に何をなし得ましょう。 （詩篇 56:11）  
（途中から朗読調に）主を信じる者は、主にゆだねます。お任せします。主を信じる者は、暗いことを考えません。絶望いたしません。一日中くらいことを考えたり、絶望的なことを予想することは、まだキリストを知らない人のすることです。明日への暗い予想を、主にゆだねるすべを知った人は、もうすでに、不幸の中にいない人です。なぜなら、主はどんな時にも最善をなさるのですから。」

雪  
母  
春  
雪  
ナレーション  
あ、おやじがいつも言ってたの、これだったんだ…。よーし、今日はやるぞ。  
雪、頑張るのよ。  
兄貴、しっかりね。  
ああ。  
今、おれの心に不安はない。まだクリスチャンでもないのに、何だか不思議な気がする。昔はあんなに不安だった。学力のことや髪の毛のことなど、もう気にもならなかった。

父の声  
ナレーション  
（フィルター音。エコー）雪、神様はいつでも最善をなさるんだぞ。  
おれは、心に響く父の声を聞きながら、試験場へと歩き始めた。それは、おれの未来への一歩のようだった。

（音楽）  
（明るく晴れやかな感じ。高まって――）

<完>